

VISION 2020

神霊と真理で導く “一対一伝道”こそが勝利の鍵



4月22、23日開催の第9地区を皮切りに、7月8、9日開催の第12地区に至るまで、「VISION2020 勝利のための本部伝道方針と一対一伝道研修会」が全国16地区を巡回して行われました。地区長をはじめ、牧会者や婦人代表、教会スタッフ、基台長、前線のCIG復興団メンバーなど総勢3650人が参加。天一国の“祖国光復”と神氏族メシヤ再出発のため、真の父母様の強い願いのもとで企画された今回の研修会は、参加者全員が「疎通と共有」を通して進むべき方向性を明確にし、「必ず勝利できる」という希望と喜びを胸に決意を新たにすることができました。

今年4月、宋龍天・全国祝福家庭総連合会総会長が「全国牧会者研修会」及び「全国婦人代表研修会」において「5つの危機」を提示し、「VISION2020」を実現するために「危機から機会、さらに希望へ」と転換していく方針が決められました。これを受け、現場と本部が「疎通と共有」を図るため、本部伝道教育局の方相逸局長を中心に、篠崎幸郎伝道部長、佐々木一成教育部長、北谷真雄壮年部長兼神氏族メシヤ推進部長の教区長経験者4人が、宋龍天総会長と徳野英治・日本統一教会会長の熱き願いを受け、全国16地区を巡回して研修会を行うこととなりました。伝道教育局の局長・全部長と一緒に現場を巡回し、伝道のための1泊2日の修練会をするのは初の試みでした。

VISION2020の実現に向け、私たちの目的を果たしていくための唯一の道は伝道である、と真のお母様は語られています。真のお父様も「天一国創建は神氏族メシヤの基盤なくしてはなされない」と明言されています。私たちはお父様の聖和という大きな犠牲の上に、神氏族メシヤの使命を再度許されました。真の父母様と出発できる最後のチャンスです。これは伝道の仕方や方法論の変化という次元ではなく、伝道のパラダイムの革命的な変化なのです。摂理の軸が、因縁圏のない“荒野”から先祖、氏族、故郷に変わらなければなりません。

VISION2020の勝利は、私たちが真の父母様と一体となり、伝統と文化を相続すると同時に、本部と現場が意思疎通して目的、方向、戦略を一

致化することによってのみ可能となります。聖和3周年を迎える今こそ、天の爆発的伝道の役事が起こらなければならない時です。そのためには、霊界から導かれる心情の動機、基台が必要です。この修練会はそのカギを探し求め、悟る修練会でもありました。

開講式で徳野会長は、真のお母様からの大方針は「神霊と真理によって導くこと」であると強調。私たちは信仰の原点に立ち帰って「個の強化」を図りながら、①直接伝道 ②一対一伝道 ③神氏族メシヤの使命完遂 ④祝福伝道 ⑤訓読家庭教会の定着——という基本方針に沿って、伝道を推進していくと語りました。

各地区長の挨拶に続き、方局長が行った講座の中で特に印象的だったのは、冒頭に聖者ガンジーの例を挙げながら、「心」という字について語った内容でした。心に「私は氏族メシヤになる」という信念の“棒”を打ち込めば、「『必』ずできます」になり、「Impossible」（不可能な）に信念の“棒”を打ち込めば、「I'm possible」（私はできる）となると述べ、参加者を激励しました。

続いて、松戸教会の小澤秀幸教会長と姜京姫さんによる路傍演説伝道の証しは、神様が間違いなくこの一対一伝道を導いておられ、5つの危機の解決策も一対一伝道であり、神氏族メシヤの勝利の鍵もここにあることを確信させる内容で、多くの食口に感動を与えました。

伝道教育局の3人の部長による講義では、まず北谷部長が、真の父母様のみ言を中心として、神氏族メシヤの価値と心構えについて解説。その上で、“天一国国民”として家庭教会長・神氏族メシヤの立場で活動を進めていく意識付けを行いました。

1日目の最後の講座では、篠崎部長が「親子の一対一の関係と同じように、霊の親子も一対一の関係です。生活圏伝道を展開するためには、まず私たち自身の家庭生活の習慣性、接し方から研究し改善すべきです」と指摘。「『人を育てるのは原理講論のみ言以外にはない』というお父様のみ言に立ち返ることが爆発的伝道の鍵です」と語り、ユーモアの中にも伝道の本質を明確にしました。（3面に続く）



研修会2日目は、法務局の田坂義和法務部長によるコンプライアンス（法令遵守）に関する講座があり、「私たちは高い倫理観を持たないといけない」と述べ、VISION2020を勝利するために不可欠なコンプライアンスの徹底を訴えました。

続いて、佐々木部長は伝道教育ラインに関する講座の中で、神氏族メシヤ家庭教会の青写真を示しながら、天一国時代の新しい文化のもとで母の国の使命を果たすことのできる神霊と真理による伝道教育ラインを提案。参加者の多くから「スッキリと整理することができた」という感想が寄せられました。

午後からは、5つの本部方針のテーマに沿ってグループディスカッションを行った後、代表者5人が発表。各グループにおいて希望に満ちた良き交流の場になりました。

この全体ディスカッションに先立ち、初日の夜は地区長と教区長、婦人代表によるディスカッションが、2日目の早朝には全牧会者と全婦人代表によるディスカッションが、それぞれ行われました。この3段階のディスカッションこそが、本部と現場の「疎通と共有」を図る最大のポイントとなりました。

最後に地区長からの総括と激励を受けた後、「日本の食口よ立ち上がれ」の映像を通して真のお父様がこの日本に投入された熱く深刻な心情に触れ、多くの食口が涙を流しました。

方局長は総括の中で、「最後は自分が決意しないと変わらない！ 伝道は手段や方法ではない！ 今日を起点として、聖と3周年までに一人ひとりが何人を伝道し、祝福しますか！ 明確な目標と決意を持って出発して欲しい」と訴えました。



今回の研修会を通じて、私たちの全ての危機を克服する突破口は一対一伝道であり、神氏族メシヤの勝利によってすべてを解決することができること、そのために自分自身がもう一度悔い改め、信仰の原点に立ち返らなければならないこと、そして今こそ神氏族メシヤに向かって再出発する最後のチャンスであることが明確に分かりました。

今年は真の父母様が日本に8大聖地を決定してくださって50周年の年です。このタイミングで行われた研修会は、参加総数3650人という点を見ても、「基元節と祖国光復の為の神氏族メシヤ3600名原理本体論30日特別教育」に匹敵する重要な研修会だったと言えます。天一国創建と神氏族メシヤ使命完遂のために準備された今回の研修会は、天の大きい導きの中で、参加者に希望と喜びもたらす機会となりました。



①タブレット端末を活用した伝道について説明する方相逸伝道教育局長 ②一対一伝道を指導する篠崎幸郎伝道部長 ③伝道教育ラインについて説明する佐々木一成教育部長 ④神氏族メシヤについて講義する北谷真雄壮年部長兼神氏族メシヤ推進部長 ⑤コンプライアンスの重要性を訴える田坂義和・法務局法務部長 ⑥路傍演説伝道の証しをする千葉・松戸教会の小澤秀幸教会長 ⑦路傍演説伝道の証しをする千葉・松戸教会の姜京姫さん ⑧第1地区「本部方針と一対一伝道研修会」の参加者（5月1日、札幌市） ⑨熱心にディスカッションを行う参加者（第11地区）

【参加者の感想】

- 希望の時が来たと実感できた研修会でした。結論は、「私が変わること」であることが明確になりました。こんなに希望に満ち、感動し喜びをもって参加できた研修会は初めてではないかと思います。真の父母様の勝利圏を証しすることのできる真の息子、真の主人となって神氏族メシヤを勝利したいと思います。（牧会者）
- 本部の方針が総会長、会長の熱い決意として深く感じられました。一対一伝道は、伝道の一つの方法ではなく、私たちの信仰姿勢の表れ、真の父母様への孝行の心情の発露であると理解し、実践を決意しました。牧会者に対する天の本来の願いを実感しました。（牧会者）
- 伝道が行き詰まる状況の中で、外的な方法・手段だけにとらわれていたことを感じ、悔い改めて再出発しなければならないと思いました。固執した考え、荒野路程から家路に帰ることができない心情、その中心軸の立て直しの必要性を本部の講師の方々を通じて教えていただき、心から感謝いたします。（婦人代表）

子女を信じて厳しい道に送り出す父母の心情

李海玉先生のメッセージ

このメッセージは、6月17日に宮崎台国際研修センター（川崎市）で行われた「第6地区霊肉合同93日特別精誠摂理決断式」で、李海玉先生（宋龍天・全国祝福家庭総連合会総会長夫人）が語った内容を翻訳し、要約したものです。



今日の出発式には、誰よりも宋龍天総会長が参加されたかったのですが、突然の予定のためにかないませんでした。昨日も電話で「体は行けないが、心はいつも6地区の食口達と一緒にだよと必ず伝えておくれ」とおっしゃっていました。

先ほど「6数」の話が出たので数字の話をしてみます。真のお父様が（み言を語られながら）指で数字を数えられるお姿を皆さんも覚えているでしょう。ところが、（お父様が指で示される）法則を誰も理解することができないのです。私がビデオで何度見返しても、やはり分かりませんでした。私たちは本当に頭の足りない者たちです。そんなお父様に侍っていた私たちが、摂理を理解するのは不可能です。

私たちには、地上世界で起こることをすべて理解するのだけでも難しいのです。なぜ地震が起きるのか、科学的に説明すると言ったところで、まだ十分ではありません。

ましてや、霊界について理解することはもっと難しいのです。地上と霊界だけではなく、さらに心情世界もあります。心情世界というのは霊界とも異なり、十分に説明ができない世界です。

こんな複雑な世界全体に責任をもって歩まれたのがお父様です。真の父母様というのは統一教会だけの救世主ではありません。今まで父母様が摂理を進めてこられた内容を見つめると明らかなのは、父母様は統一教会だけのメシヤではないということです。



真の父母様の路程を考えると、胸が痛い内容があります。私はキリスト教の出身ですが、キリスト教が文化的に根を下ろし、驚くべき影響力をもつように至ったのは、十字架があったからです。イエス様がもし十字架を担わなかったならば、十字架上でドラマチックに逝かれることがなかったならば、あれ

ほど多くの人々を感動させることはできなかったでしょう。

「私の罪の故にイエス様はあのように血を流して逝かれた」という事実一つとってみても、人々は感動します。これがキリスト教徒になっていく道なのです。主の流された血の十字架を私も担うという心持ちで、数多くのキリスト教徒たちが殉教の道を歩みました。

私たちの真の父母様はどんなお姿なのでしょう。私が統一教会に入って一番悩んで葛藤したのが、その点なのです。

イエス様はあのように十字架を担われましたが、私たちがお父様はサングラスをかけ、カッコいい服を着られ、立派な車に乗られ、立派な家に住んでおられました。「お父様は私が想像してきたメシヤとはイメージが違う。私はこれをどう受け止めるべきなのか」ということは、統一教会人としての私の宿題、信仰の挑戦でした。

1998年にブラジル・ジャルジンで理想家庭のためのセミナーがありました。そのときにお父様がくださったみ言の中に、「父母になると、子供から放たれる矢もすべて涙で耐え、子女から与えられる喜びだけを記憶していこうと考える。子女のためにすべてを犠牲にしていくながら父母の道だ」という内容がありました。

そんな中、実際に大変な事件がアメリカで起きたのです。（文孝進様の前夫人）H氏の事件です。テレビに出たり、本を出版したり、お父様に対する多くの非難を行いました。

お父様のそのみ言が、私の胸の奥に深く刻まれました。「人類の真の父母として来られた方は、肉身の十字架ではなく、心情の十字架を背負っていかれるのだ」ということを初めて深く悟らされたのです。

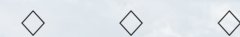
その瞬間から、お父様が全く別人に見えるようになりました。お父様はいつも孤独で寂しい方だと感じました。お父様が

歌を歌われても、まるで泣いておられるかのように見えました。お父様の心情世界というものを感じさせて頂く契機となりました。

今は真のお母様も同じ道を歩んでおられます。多くのご子女様がおられますが、ある子女様から放たれる特別な心情の十字架（矢）を受け取っていかれるお母様なのです。

そのような父母様の痛みを目の当たりにしながら、私たちはどのようにして子女という名前を相続できるのでしょうか。子女というのは、血統だけをもって受けるではありません。世の中に数多くの子供たちがいますが、自分が生んだからと言って、子女たちの心情は分かりません。心情を理解し合うというのは簡単ではないのです。

本当の子女になるとは、心情の子女になるということです。天地人真の父母様が一生を通じて行かれた心情の十字架の道に少しでも同参しようという心情になると、私が「私が子女です」と天の前に言えるのではないのでしょうか。



私たちは今まで一生懸命走って来ましたが、まだ最終目的地には到達していません。最終目的地を知って向かう者は、どれほど大変で疲れたとしても、放棄することはできません。残された道があることを知っています。私たちが進めば進むほど、私たちの子孫達が行く道は短くなります。駅伝のように、私たちが苦勞して行くなれば、私たちの後を走る走者は少しでも早く、天の父母様と天地人真の父母様の心情の中に到達できるのです。

先ほど刑部徹第6地区長が私を「母」と呼びましたが、私は日本に来るのが怖かったのです。できるならば、日本に行くのを避けたかった心がありました。

アフリカでは、歌ってうまく踊れば、宣教ができるのです。一緒に歌って踊り、（手で太鼓を叩くように）リズムをとるだけで、いくらでも心で共感することができます。ところが日本は息がつまります。ですから日本に来たくはなかった。私は「母」の資格がない者です。

先日、ラスベガスに行ったときの事です。（日本人ではない）ある公職者の婦人がこう言いました。「私たちがもっと早く献金をしていれば、もっと早くピースパレスを奉獻できていたのに」。

私はその言葉を聞いた瞬間、頭が狂いそうになりました。怒りがこみ上げたのです。そして涙を流し続けました。論理的に考える余裕がなく、聞いた瞬間、涙が溢れたのです。お金を使う者は、お金をつくる者の心を知ることができません。その言葉は間違っていないかもしれませんが、同意することができませんでした。

日本の食口達を悪く言う者があれば、「うちの子の苦勞をどう思っているのだ」と、その人のお尻を蹴り上げてやりたい思ひになります。そういう心情が沸くということは、少くくは母の資格があるということでしょうか。（拍手）

私たちの二人の息子はイギリスで、アルバイトを3つ、4つ掛け持ちをしながら、苦勞をして勉強しています。食べている物を見ても、厳しい生活です。学費をためるために休学し、アルバイトをしてから復学する息子たちの姿を見ると、母としてどれだけ助けたいと思うのでしょうか。

ところが、夫は「絶対に助けるな。お金がなくて苦學してもいいのだ。助ける必要はない」と言われるのです。その件で、だいたい夫とぶつかりました。

私たちが日本に来てから3年目に入りましたが、息子たちは父母を恨むことに疲れたのでしょうか、だんだんと理解する段階に入ってきました。

今回、少し会えたのですが、末っ子がこんなことを言いました。「本当にありがとう。お父さん、お母さんが私を信じてくれた。『お前ならやれる』と信じてくれたから、休学して魚を扱う会社で働くことが許されました。私を憎んでそうしたのではないということを知りました」。そして、彼は「祝福を受ける準備ができました。一人の女性に責任を持つ準備ができたようです」と言うのです。参考までに彼は22歳です。（拍手）

短い期間に息子が成長できたことは、私としてはある意味驚きでした。その背後には、「お前ならやれる」と信じてあげたことがありました。本当に死ぬほどの苦勞をしたのかもしれませんが、その段階を上らせることができました。

日本の食口を思ったときに、とても胸が痛みます。しかし天は「この母の国の優秀な食口たちはやれるのだ。これが難しいことは百も承知だが、それを通して私の心情を理解し、私の子女であるという資格を持つことができる。そのレベルまで中断することなく、失敗することなく来てくれるということを私は信じている」と見守っておられるのです。父母の信頼がなければ、子女は成長することができません。辛く厳しい道であることは分かっている、父母は子女がやり切ってくれることを信じて、送り出すのです。そうしなかったら、体は大きく成長するとしても、心は決して成熟しないでしょう。

真の父母様のそのような大きな信頼があるので、日本を母の国として定められ、母であるという資格を持たせるために、辛い思いをもちながらもなお信じてくださるのです。そうすることで、母の国・日本を世界に誇りたい真の父母様なのです。

私たちの心を天上のお父様と地上のお母様の心とぴったりと一致させて進んで行くなれば、どんなことがあっても寂しくありません。必ず勝利を収めることができるのです。

家族重視の少子化対策の推進を

広島で「ILC-Japan 2015」開催



①「ILC-Japan 2015 in 広島」(7月4日、広島国際会議場)
②主催者を代表して挨拶をする徳野英治・UPF 日本会長
③梶栗正義・真の家庭国民運動推進全国会議事務総長

世界に例を見ない規模とスピードで進行するわが国の高齢化と、出生率低下にともなう少子化のもたらす国家的な危機打開の方策を探る「ILC-Japan (日本国際指導者会議) 2015 in 広島」(主催・UPF、平和大使協議会)が7月4日、「家庭の危機と再生へのビジョン:少子化非常事態と日本の選択」のテーマのもと、広島国際会議場で開催されました。

開会にあたって、主催者を代表して徳野英治・UPF 日本会長が「最近のわが国では、家庭の価値や性のモラルが崩壊し、それにともなって親族間の殺人事件や10代の妊娠、離婚の急増といった深刻な事態が進行しています。この会合が家庭倫理の再建を通じて、わが国の真の再建につながる救国運動の出発となることを願っています」と挨拶しました。

この日行われた3つのセッションの冒頭にあったセッション1で、梶栗正義・真の家庭国民運動推進全国会議事務総長が、「家庭の危機と再生へのビジョン」と題する提言を行いました。

梶栗事務総長はまず、「『人口減社会』の日本の未来」と題して、様々なデータを示しながら、最近の日本政府の施策について紹介。続いて、「少子化対策の『スウェーデン・モデル』光と影」と題して、家庭機能を「外部化」し、個人を単位とする立法・社会政策を導入し、結果として結婚・家庭制度崩壊に至ったスウェーデンと、家庭を重視した「家庭政策」を熱心に推し進め

た結果、出生率が上昇しているフランスの例を取り挙げました。

梶栗氏はこれら諸外国の少子化対策の事例を踏まえ、「家族の価値と家庭基盤充実型の『家族政策』」において、わが国は家族を重視したフランス型の「家族政策」を参考に、家族と地域の絆を強化する家庭基盤充実型の少子化対策の「日本モデル」を立案し推進すべきだ述べました。

続くセッション2では、大学名誉教授が「共感性や情緒を育むための家族支援」と題して講演しました。家族臨床福祉学が専門で、理論研究だけでなく臨床での経験も豊かな畠中教授は、現代社会では人々が生産的・課題達成型の価値観を追求し、利便性・快適性・効率性を追求する一方、関係性を過小評価し、経済的豊かさを求める富裕化の過程で(私的な関心を優先させる)「私事化」の傾向が強まっていると指摘。その結果生まれた富裕化した社会では、私事化の肥大と規範の希薄が進行し、子供の共感性や情緒の発達への配慮を欠落させてきたのではないかと分析しました。その上で、こうした現状を踏まえ、個人の利便さや快適さでなく、家族一人ひとりの人間としての成長を家族支援の目的とすべきではないかと訴えました。

梶栗事務総長の提言と大学名誉教授の講演に続くセッション3では、パネルディスカッションが行われ、会場の参加者との間で活発な意見交換が行われました。

開拓伝道精神を相続し、伝道を勝利しよう！

第5地区「CIG・伝道前線出発式」



①講話を行う久保木哲子夫人
②激励のメッセージを語る金満辰・第5地区長
③出発式に参加した5地区CIG復興団のメンバー

7月7日、東京・高田馬場の新宿教会で、久保木修己・日本統一教会初代会長の令夫人、久保木哲子夫人をお迎えし、「第5地区CIG・伝道前線出発式」が行われ、5地区(東京)のCIGメンバーら350人が参加しました。

木下博文・西東京教区副復興団長の司会で始まった出発式では、まず天馬教会のCIGメンバーが、久保木会長が作詞・作曲した「愛の統一」など3曲を披露し、会場を盛り上げました。

次に、敬拝と家庭盟誓、代表報告祈祷の後、井場郁郎・第5地区伝道教育部長が6月度の報告を行い、伝道優秀者に金満辰第5地区長と久保木夫人から表彰状と同夫人の著書『愛あればこそ』が贈呈されました。

金満辰地区長は挨拶で、「1967年7月、喘息に苦しむ愛する長男を残して、久保木夫人は40日の開拓伝道で宮崎に行かれましたが、開拓伝道を終えて帰宅すると、長男は見違えるように元気になっておられたのです。私は生きて働かれる神様のみ業に涙が出ました。7月は開拓伝道の月です。我々も頑張つて東京で伝道を勝利しましょう」と激励しました。

久保木修己会長の記念映像を視聴した後、久保木夫人は記念講演で、1968年に自身が参加した430双の祝福と、宮崎

の開拓伝道の証しを交えながら、真のお父様との出会いについて次のように語りました。

「私はよく、お父様とはどんな方かと聞かれますが、お父様という方は私達の物差しでは測ることが出来ません。お父様は『どんなに苦しい道を行っても、神に助けてほしいと祈ったことはない』と言われ、そのように実践してられました。私が山口、宮崎、鹿児島を巡回した時のことです。1カ所3回、最後は夜の8時から講演するという過密スケジュールで疲労困憊する中、朝方、夢を見ました。私の疲れた体を一生懸命さずって下さる方がいました。夫かと思って振り返ると、お父様ではないですか。それから、私の手を引いて、お元気に階段が上がっていかれました。お父様は私の仕事をご存じではないはずなのに。その時、私は目に見えない神様の実体であられるお父様を実感したのです」

久保木夫人の祝福の後、入澤淳一・南東京教区副復興団長のリードで億万歳四唱を行い、出発式は終了しました。

講演を通じて参加者は、あらためて天の父母様(神様)と天地人真の父母様がいかなる方であるかを理解し、初期の開拓伝道の精神を相続して出発することができました。

神霊と真理による価値の転換を目指して

第17回「夏の大讃美・原理大復興会」に1100人が参加！

6月17日、札幌市内の会場で「第17回夏の大讃美・原理大復興会」(主催：世界基督教統一神霊協会第1地区)が開催され、新規の参加者200人を含む約1100人が参加しました。

2011年から始まった「大讃美・原理大復興会」も今年で4年目を迎えましたが、伝道と教育、神霊と真理による価値の転換を目的に年4回開催される一大イベントとなりました。

特に今回は、6月22日の「日韓国交正常化50周年」を記念して、日本統一教会の友好団体である平和統一聯合の大塚克己会長を迎えとともに、特別ゲストに在日三世で歌手の林玉順さんが参加しました。

開会に先立ち、北海道にある15の聖歌隊が、聖歌や讃美歌、愛唱歌、オリジナル曲等を披露し、神様とイエス様、真の父母様を称えながら讃美。

オープニングは、文孝進様の楽曲「汽笛」が流れる中、光の芸術・ライティングショーが始まりました。次に、和服と韓国のチマチョゴリをまとった日本と韓国の婦人が、「ふるさと」と「ホルロアリラン」をメドレーで歌うと、会場は日韓友好の雰囲気に包まれました。

敬拝、家庭盟誓、代表報告祈祷、矢吹恭一・第1地区長の主催者挨拶に続き、特別ゲストである林玉順さんが卓越した歌唱力で「イムジンガン」など3曲を歌いあげると、その力強さと心情世界に客席は引き込まれました。

基調講演を行った大塚会長は、夫婦のエピソードを引き合いに出しながら、家族も国家間も互いの違いを理解しあい一つに

なることの大切さを強調。また、真のお父様との出会いを通して体験した、人間の力を超える“時”を見極める感性や、夫婦愛に関する奥深いみ言を紹介しました。ユーモアを交えた講演に多くの参加者が共感と感動を覚えました。

最後は、オリジナル曲「父母様のもとへ」を参加者全員で歌い、真の父母様を中心として会場全体が一つとなり、大きな恩恵を受けることができました。

また、歌った曲も日本語、韓国語、英語、ドイツ語の4カ国語で、国際色豊かな復興会となりました。

【参加者の感想・証し】

○久しく教会関係の行事に参加できずにいたのですが、大塚会長のメッセージが分かりやすく、今悩んでいることの答えをいただきました。林玉順さんの歌声を聴いた途端、自然と涙が出て心が洗われるようでした。今日は参加できて本当に嬉しかったです。(35歳 女性)

○讃美礼拝は初めての体験で感動しました。講演もとても分かりやすい事例を交えてお話しされ、素晴らしかったです。(78歳 女性)

○特別ゲストの林玉順さんの歌に心を打たれました。何曲聴いてももっと聴きたいと思いました。また、聖歌隊や日韓の婦人の歌も心に響き、不思議と涙が出ました。(52歳 女性)



①講演する大塚克己・平和統一聯合会長 ②聖歌隊による讃美 ③牧会者、出演者、大会スタッフで記念撮影 ④和服と韓国のチマチョゴリをまとった日韓婦人による合唱

家庭書写会の恩恵を地域社会に連結しよう！

天一国創建のための「第2回 16地区自叙伝書写伝道大会」

6月16日、岡山教会に第16地区(兵庫、岡山、鳥取)の牧会者、教会スタッフ、教会員が集い、天一国創建のための「第2回 16地区自叙伝書写伝道大会」が開催されました。

1部のアトラクションでは、岡山教区の青年女性グループ「ウリヌン ポップ」が楽しいダンスで会場を盛り上げる中、責任者もサプライズで登壇して青年と一緒に踊り、会場全体が喜びと感動に包まれました。次に、岡山教区の聖歌隊「スター クレイン」が歓喜の歌「ハレルヤ・コーラス」、「アメイジング・グレイス」を大合唱、大会を盛り上げました。

その後、熱心な活動と温かい書写会の雰囲気が伝わる、書写伝道の様子が映像で紹介され、昨年1年間の各教会の伝道優秀者が表彰された後、各教区代表者による伝道の取組みの報告と証しがありました。

2部では、まず陸泰昊・第16地区長の主催者挨拶の後、メインゲストの浅川勇男先生が、「家庭書写会の基盤で千名礼拝を基元節に捧げよう」と題して講話を行いました。

浅川先生は、2020年までに天一国を創建するためには個人ではなく家庭が重要であり、家庭書写会の恩恵を地域社会に連結し、市町村から国家的基盤に拡大することの重要性を強調。その上で、祝福家庭を中心として「一つの教会で1000人が集う礼拝の基盤を立てていきましょう！」と激励しました。

今回の大会は、2020年までに自叙伝書写伝道を通じて、天

一国創建の門を開くというビジョンを共有し、勝利を決意する場となりました。講話の後、全体で「愛天愛人愛国」の書写と抽選会の時間を持ちました。

最後に、青木大・岡山教区長が「2020年、神氏族メシヤを勝利して、真のお母様をオリンピックスタジアムに迎え、天一国創建勝利億万歳を致しましょう！」と挨拶し、億万歳を唱和して、大会は終了しました。

【参加者の感想】

○真の父母様を誇り愛して、家庭教会・神氏族メシヤ活動を推進することが、天一国創建に向かう道であることに、とても希望に感じました。自叙伝を通して、氏族を中心に家庭教会を構築する事から地域の基盤を作ることの大切さをあらためて確認しました。

○陸地区長の挨拶で、「真の父母様を信じましょう。役事が起きます」という力強いメッセージをいただきました。浅川先生の講話では「自叙伝のみ言を心に刻み、書写で革命を起こす。生活が変わる、今変わらないといけない！」が印象的で、もう一度自叙伝を通して真の愛を学び実践して悟りを開いていきたいと思いました。



①岡山教区の聖歌隊「スター クレイン」
②書写伝道大会の参加者たち
③表彰された伝道優秀者

一人ひとりの霊的生命を守る決意新たに

「全国家庭部長研修会」開催



①全国家庭部長研修会の参加者
②講話を行う徳野英治会長
③ディスカッションをする参加者
④笑顔でコミュニケーションの実践をする参加者



7月2日から4日までの2泊3日の日程で、千葉県浦安市の一心特別教育院で「全国家庭部長研修会」が開かれました。各地区、教区を担当する79人の家庭部長が全国から集まり、様々な講義や講話、ディスカッション、質疑応答などを通じて、充実した3日間を過ごしました。

研修会は、①2015年度家庭教育局8大方針の理解、②家庭部長の内的姿勢及び家庭部長の職務分掌の再確認、③各種業務、基準、規約の確認、④交流及びディスカッション——などを目的に開催。多くの講師陣を招いての学びの場であるとともに、現実の課題を解決するためのディスカッションなどを行う貴重な機会となりました。

研修会では、徳野英治・日本統一教会会長が、真のお母様と真の子女様の近況のほか、現場における家庭部長の使命や心情姿勢、真の家庭を作っていくことの大切さなどについて解説。参加者たちが新たな心情で出発する時間となりました。

また、佐野邦雄家庭教育局長の講話を通じて、2020年に向かって家庭教育局が進む方向性や、今という時の祝福の取り組みと展望について学び、全国の担当者が意識を一つにしながらか決意を新たにしました。

今回の研修の中心的課題の一つとして、家庭部長の内的姿勢の向上がありました。

家庭部長の担当分野は、一人ひとりの人生と信仰生活に深く関わっているため、食口の話に真摯に耳を傾け、心情をしっかり受け止めることが必要です。

そこで今回の研修会では、阿部美樹・教会成長研究院長からコミュニケーション講座を受け、実際の会話を交えながら、和やかな雰囲気の中にも貴重な学びの時間となりました。

また、内田由喜講師の講義を通じて、家庭部長の職務の中心は、食口・祝福家庭に寄り添い、幸せな家庭に導くことであり、伝統と血統を守る教育をサポートすることであることを再確認。参加者は、何よりも一人ひとりの霊的生命を大切にすることを決意しました。

今回の研修会では、ディスカッションの時間を従来よりも長くとり、様々な課題とその解決策について話し合いました。祝福業務や面接、マッチングサポート、信仰指導など日頃から様々な責任を担っている家庭部長だけに、同じ立場の仲間が集まり、事情を共有しながら話し合うことで、心情が解放され、新たな力を得て出発する機会になりました。

一方、参加者が地区ごとに集まり、今後の取り組みについて自主的に検討し合う時間を持ち、今後の現場での活動につながる話し合いを行いました。

質疑応答の時間は、基本方針の確認から、難しいケースへの対処に至るまで、様々な質問が出る真剣な場となりました。

今回の家庭部長研修を通じ、参加者たちは家庭部長の使命を再確認し、今後も多くの内容を学んでいく必要性を痛感。また、各教会の家庭部長に至るまで、内外の教育を進めていくことを決意し、それぞれの現場へと出発しました。

全国の伝道の証し

VISION2020の勝利、神氏族メシヤの使命完遂を目指し、伝道の最前線で歩んでいる全国の祝福家庭・統一食口の証しを紹介します。

タブレット伝道で出会った初めての霊の子

西広島教区 中央教会

私（女性）はCIG復興団に入団してから2年7カ月になりますが、昨年秋から中央教会では、タブレット端末を携えての伝道活動が始まりました。

今までは、出会いがあっても教会に戻ってから視聴する映像を決めるなど、何かと時間がかかっていましたが、タブレット端末を使用することによって、その場ですぐに視聴できるので、スピーディーになりました。

また、最初はごちなかった原理講義も、原理を語り続けることで自分自身も原理への理解が深まり、自己伝道の意味が分かるようになりました。

伝道ではいつもペアを組んで行っていますが、ゲストに何の映像を視聴してもらうかを決めるときには、2人の思いが一つでなければいけないと感じています。

私は1年間、Nさんとペアを組み、Nさんのゲストを伝道することを通して、姉妹との関係が本当に大切だと思いました。お互いの足りないところを補い合い一つとなるところに、神様が働かれるということを実感したからです。

そんな中、今年1月にSさんに会いました。実は、Sさんは36年前に新潟で教会に来ていた方でした。

会った時、Sさんは真のお父様の自叙伝を持っておられ、深く読み込んだ跡やお父様の聖和の新聞の切り抜きを持っておられました。タブレットで映像を見られた時、「文先生は年を取られた……」と、とても寂しく申し訳なさそうにつぶやいておられました。

その後、Sさんは書写を始めることになりました。教会にはまだ躊躇いがあるようでしたが、書写会に参加されるようになり、今では書写を通じて生活や行動が変わったことを実感しておられます。

ある日、Sさんから「まだ話していないことがある」と切り出されました。これまで3度、伝道されましたが、2度目に群馬で教会活動をしていた時に交通事故に遭ったそうです。その身辺整理が出来ず、逃げるようにして教会から離れ

てしまったことをとても後悔しておられました。Sさんは、告白をしたことで心が軽くなったようで、新しい出発が出来たことをとても喜んでおられました。

私にとって、Sさんは初めての霊の子です。

私自身も一度、教会から離れた経験があり、Sさんの話を聞きながら自分と重なるところが色々ありました。神様も真の父母様も愛していながら、それでも離れてしまった後ろめたさや申し訳ない気持ちがあり、教会に戻るのには本当に簡単ではありませんでした。

私は教会に戻る決心をした時、「神様が待っていたよ」と霊の親から言われた一言で、悔い改めと感謝の気持ちで再出発することができました。

当時の情景と心情を思いながら、私もSさんに「神様が待っておられました」と伝えることができました。

今は、礼拝と書写会に参加され、週に1度、統一原理を学びに通って来られますが、祝福に向って教育も進めて行きたいと思います。

全てが神様の導きであり、神様から預かった命だと思って感謝しています。



タブレットを活用しての伝道する教会員